

第16回デイサービスセンターかおり 運営推進会議 議事録

日時：令和6年7月17日水曜日 18時～19時

場所：デイサービスセンターかおり 食堂兼機能訓練室

テーマ：災害対策を考える

参加者：松前町長、松前町保険課職員1名・松前町危機管理課職員3名・
外部関係者2名・利用者家族7名・事業所職員19名
合計33名

1. 開会の挨拶 生活相談員：田中導

本日は、かおりの運営推進会議にご参加いただき、ありがとうございます。

今回のテーマは「震災」です。

今年の元旦には能登半島地震があり、その後も全国各地で地震が頻発しています。

近い将来、起きるであろうと言われている「南海トラフ地震」に備えて、今一度、震災について話し合う機会になればと思います。本日は、松前町長の田中さんと役場の危機管理課の方にもご参加いただいています。

私たちは、6年前に、当時の松前町役場の防災担当の方と話し合った際、避難場所は松前体育館が良いという結論に至り、毎年の防災訓練で、スタッフと利用者さんとで松前体育館へ移動する訓練をしていました。しかし、色々調べるうちに、震災直後は、体育館のエレベーターや水洗トイレが使えず、再開にかなりの時間がかかることがわかりました。

今年の能登地震でも、避難所生活を支える医療福祉関係者の不足や、避難所の設備の問題が顕在化していました。

この6年間で調べたことについて、盛次先生よりお話をさせていただきます。

明日起きるかもしれない災害について、今回参加されている皆様のご意見も是非、聞かせてください。

一時間ほどではありますが、最後までお付き合いのほどよろしくお願いします。

2. 講義「災害対策を考える」 理事長：盛次義隆

南海トラフ地震は、100年から150年の間に必ず1回は起きています。起こるであろうではない、次の地震はあと30年から80年の間に、「起きる！」と考えるべきです。

津波も発生。2時間余りで到達します。ハザードマップによると、このあたりは1メートルから2メートル浸水するので、この施設は使えなくなります。

必ず起きるとわかっている地震と津波、地震国としてきちんと対策を講じるべきです。

では、他国の地震災害対策はどうなのでしょう。同じ地震国であるイタリア、トルコ、台湾と比較してみましょう。

まず、イタリアの地震対策について、

注目すべきことは、「TKB」がしっかりしているところ。T=トイレ、K=キッチン、B=ベッド。

この3点は命にかかわることです。例えば、トイレが汚い→行きたくないから我慢→水分を控えるように→脱水となる・・・のように。熊本地震では2次災害で亡くなった人の数の方が多かったという事実があります。



イタリアでは、地震発生から 48 時間以内に快適なコンテナ型トイレと家族ごとのテントとベッドが提供されます。災害が発生すると政府から州の市民保護局に対して、72 時間以内に避難所を設置するように指令がでます。それは、被災した自治体ではなく、周辺で被災を免れた自治体に対して。歩いて入れるほど屋根が高いテントは被災した家族ごとに割り当てられます。カーペットが敷かれ、人数分のベッドや冷暖房装置も設置されています。避難所運営に奔走する自治体職員の姿が、日本では美談として取り上げられますが、アメリカやヨーロッパなら、人権侵害、あるいはハラスメントです。イタリアでは災害関連の国家予算は約 3000 億円。テントやトイレ、キッチンなどを備蓄し、搬送用のトレーラーやトラックのメンテナンスもしています。

イタリアで災害対策を行う市民保護庁が発足したのが、約 40 年前。それまでは、現在の日本のように、災害支援は市町村に丸投げしていました。1980 年に、イルピニア大地震が発生し、建物の倒壊などで約 3000 人が亡くなりましたが、被害はそれだけに止まらずに、災害対応の遅れで、約 1 万人が避難生活で、病気を発症し、命を落とす被災者も多かったそうです。現在は、まずは市民の命を助ける、その後、いち早く社会復帰を果たしてもらう。それが、市民生活の保障や経済の早期復旧につながり、被災者自身のためになると受け止められています。

次に、今年大きな地震「台湾半島地震」のあった台湾です。
(TV 朝日の記事を視聴:テレ朝 news より)

素早い対応に驚きました。なんと、テント設置が2時間後です。

日頃から、行政とボランティア団体との協力体制がしっかりしてます。役割分担も。例えば A 団体はテントや毛布、食事を提供、B 団体は子供のケアを…のようにそれぞれの団体がどこでどんな支援をするかを、上手く組み合わせて、すぐに提供できるということが特徴です。

もう一つ注目すべきところは、地震発生から4日で避難所は閉鎖され、被災者は寺院の宿泊施設に移ったというところ。避難場所となっていた体育館の学校運営を妨げないようという配慮までできています。

台湾と日本は似ているところが多数あります。地殻の条件や住民が街づくりの主体となっているところも。台湾をお手本に同じ位に日本も追いつけそうかなと思っています。

次はトルコ、

マグニチュードの大きい地震が起きます。そして建物の崩壊が激しいのが特徴です。

1999年のイズミット地震をきっかけに耐震基準を強化しましたが、22年時点で基準を満たさない建物が全国に670万棟。耐震基準を守らないと罰金ですが、その罰金で自治体が潤うため、自治体も基準達成にそこまで力が入らないかもしれません。

避難所のテント等は、自治体ではなく国が管理し設置しています。



では日本はどうでしょう。



熊本地震の避難所を見ると、体育館に布団を敷いて、仕切りなし、プライバシーなし。車の中の方がいいという人の気持ちが分かります。100年前の関東大震災の避難所とほぼ同じ状態でした。

能登地震の避難所では、段ボールで仕切りが出来ています。少し進歩しましたね(笑)。石川県が設置した1.5次避難所も話題となりましたが、障害者・高齢者・未就学児のいる家庭が対象のもので、ベッドもない簡易なものでした。もっとしっかりしたものは国が主体となって

準備しないと無理だと思います。

災害時の考え方も日本は独特です。災害だからしょうがない、我慢するしかない、被災者も国民も国もそう考えます。しかし、体育館を避難所にする先進国なんて存在しないと世界では言われています。

さて、デイサービスセンターかおりでは、災害が起きた時に松前体育館に避難することにして、避難訓練も実施してきました。しかし、災害時に踏切が通れなくなるとの情報もありますから、見直しも必要かもしれません。

デイサービスセンターかおりのある場所は、「松前町北川原」という地名の由来からも、堆積土すなわち砂地だったと考えられます。地震が来たら液状化現象が起きます。このあたりの空き家は地震で倒れる、道が塞がれて通れなくなる可能性も。所有者を明らかにしてちゃんと片付けておかないといけません。今からできることからやっておきましょう。避難場所まで行けば終わりではありません。その先の復興まで考えて対策をたてなければいけないと思います。

3. 質疑応答: 松前町危機管理課様を交えて

質疑応答1

利用者家族 A さん: 地震などは起こる事が分かっているので、各家庭で準備をしておかなければいけないと思います。防災グッズとかあると思うが、食べ物を準備しておいた方がよいか？それともテントのようなものを準備した方がよいか？全部をそろえるのはなかなか難しいと思うから、何を準備しておいたらいいか教えてほしいです。

危機管理課職員 B さん: 自宅で避難されている場合にも、トイレの浄化槽や下水が使えない場合があります。その際に簡易トイレだったり、凝固剤を入れて使用するものもあるので、そんな種類の簡易トイレの準備があってもいいと思います。食べ物についてはローリングストックなど保存できるものを保存して、それを常時使用しながら賞味期限を延ばして回転させていくという形で考えてほしいです。

テントは、持っていく必要はないと思います。基本的には自宅に避難するよりはまずは避難所に避難したほうがいいです。テントまでは持って行かなくていいので、とにかくまず避難することを優先して下さい。避難物資などが避難所には届くが、自宅には届かないし、自宅に避難していると情報が遮断されてしまうので、その場合どこに行ったらいいか、どこの避難所に行けば避難物資がもらえるかなど全く分からなくなります。以前、電気が復旧したタイミングで途中非難された方もいましたが、その方が今家にいるのかいないのかもわからなくなる状況になります。基本的には自宅で非難するのは、ある程度落ち着いてからになります。

質疑応答 2

デイ職員 C: かおりで震災があったら松前体育館に逃げようとなっているのですが、先生のお話を聞いて結局松前体育館で避難場所がいいのかどうかというところです。

先生どのようにお考えですか？

Dr.: 難しいところですね。電車が駅と駅の間で止まっていて踏切がずっと鳴ってたら通れませんか。なんとかできるんでしょうか？ 指定踏切は伊予鉄にはあるんですか？

危機管理課職員 B さん: そこまで詳しく伊予鉄の話は聞いたことがなかったですね。

どこの避難所に行かれるかは決めておいたほうがいいですね。基本的に避難所に行くことで家族の方に避難されているということがわかるので、どこに行くかわからないよりは体育館にしますとか家族の方に決めとってもらったら、そちらのほうに避難されているかどうか家族の方もわかりやすいので事前にどこそこに行く決めておいてもらったほうがいいと思います。ただ緊急時に踏切が通れないとかそっこのほうに進入ができないということもあると思いますが、その場合は一時的に小学校に行くということも考えておいたほうがいいと思います。避難所に行くことで病院に行かれるときも動きやすいと思うので、まずは人が集中して情報が入るところに行っていただくほうがいいです。今の時点で体育館に行く決めている場合は体育館に行くほうを検討してもらったらと思います。

Dr.: 具体的には第一候補は体育館で、踏切が通れない場合は小学校というふうに考えざるをえないですね。小学校は津波の高さとしても上に行けば大丈夫ですね。

そもそも上に行けるんですか？ エレベーターとかあるんですか？

危機管理課職員 B さん: 小学校とか中学校に避難される場合は上に上がって 3 階以上に避難してくださいというかたちですが、上に上がって避難していただくかたちになります。

小学校によったら給食を運ぶエレベーターが一応設備としてあります。

デイ職員 C: 震災時は電気は使えるのですか？

危機管理課職員 B さん: エレベーターは地震があった場合点検が入らないと設備上の不備があったときは稼働ができないので基本的に問題がないか確認してからでないとは動かせないというのがありますので、地震以外のケースで、津波など停電になった場合は電気の復旧が入った段階で稼働ができるので、地震か地震ではないかによってかわってきます。ただもともと松前体育館に行かれるということなので、緊急時でどうしてもダメだった場合は小学校へ行ってもらうしかないですね。

Dr.: 電車がずっと止まって踏切がおりたままなので昼間は行けなくなってしまいましたね。阪神大震災で問題になったり国会で答弁になったけれども、非常に難しい問題なんです。踏切が上がったままだったら電車も通れないしね、特定の駅のすぐそばの踏切だけ上げ下げできるようにするとかそういうのを考えざるをえないので、指定踏切というのがあって 300 か所かな、ここら辺は全然ないですが、伊予鉄に相談して駅のすぐ横の踏切を上げ下げできるようにしてもらおうよう相談してもらおうことですね。

危機管理課職員 B さん: 地震ではない状況だったとしても、踏切に閉じ込められたりしたら緊急停止ボタンを押して発煙筒をたくとか最悪その状況になると思います。

絶対通れないというわけではないです。

Dr.: どのように踏切のバーが上げ下げされるなど、伊予鉄に聞いてみてください。

よろしくお願いします。

後日、危機管理課から指定踏切について回答あり。

松前駅北側の踏切が指定踏切。災害時には伊予鉄職員が手動で踏切を操作し、通行可能になるとのこと。

4. 閉会のあいさつ 理事・生活相談員：盛次有希

本日はデイサービスセンターかおり運営推進会議にご参加いただきありがとうございました。この仕事に就くまでの私は、南海トラフ地震、いつかは起きるのかもしれないけど、その時の状況に合わせて何とかするしかないから、起きてしまったときに考えたらいいや、といった軽い気持ちを持っていました。

しかし、この松前でデイサービスを営むようになり、私たちの理念の一つでもある「酸いも甘いも噛み分けて何でも話し合える大家族になる」という気持ちで、利用者さんたちと日々を過ごすうちにその気持ちに変化がありました。東日本大震災も熊本地震も能登半島地震も、避難所で暮らしている高齢者を見ると、他人事のように思えなくなってきました。

もし明日、南海トラフ地震が起きたら？？私が担当する利用者さんは、何人が生き延びれるのだろうか、何人の方の日々の生活を守ることができるのだろうか、という不安が常にあります。前回防災をテーマに行った運営推進会議では「逃げる」をテーマに考えましたが、今は「生き延びる」ためにどうすべきか？ということを経験するようになり、日々考えるようになりました。

今回能登半島地震で調べてみると、被災後まもなくデイサービスを再開した、という記事を見つけました。どの責任者の方も、「高齢者が生活できる環境を継続しなければ、高齢者が故郷に戻れない、家族が離れ離れになってしまう可能性が高い」ため、「自分たちには事業を継続する責任がある」という強い信念をもって、営業を再開しています。人も物も金も足りない状態です。それでも事業を再開する、再開したい、その気持ち、痛いほどよくわかります。もし、南海トラフ地震が起きたら、この建物が崩壊する可能性もあるかもしれませんが、津波に飲まれてしまう可能性もあるかもしれません。国に義務付けされたのでBCP(事業継続計画)は作成しましたが、果たしてこれでいいのだろうか？いざ、この建物が使えない状況だったら、どう運営すべきなのか？という不安はあります。行政を頼りにしようとは思っていませんが、事業所ごとにばらばらに動くのではなく、町全体が一つになって、考えていく時がやってきたように思います。

私も縁あって、松前町民となりました。この街ですべて暮らしていくことになると思います。もし、災害が起きた時、私にできることは、高齢者や障害のある方へのニーズ調査やデイサービスの運営です。必要な介護を提供することはできるかもしれませんが。今回、海外の先進的な方法も色々見させてもらいました。日本には沢山の能力あるエキスパートが点在しています。台湾のように、必要なところへ必要な人材を派遣し、助け合っていくシステムができればいいな、と思います。また、イタリアのように、大洲や宇和島が被災したら、中予地区が責任をもって復興支援をする、という考えも現実的でいいな、と思いました。単純に市町村に丸投げでなく、国を挙げて災害対策取り組めるような日本にしていかななくてははいけないな、と強く感じました。そのためには私たちはもっと意識をして、色々な知識を得て、吸収しなくてははいけないと思います。そして上げるべきところに声を上げられるようにならなくてははいけないな、と再確認しました。

本日は、お忙しいなか、お集まりいただきありがとうございました。また数年後、この会で「防災」をテーマに取り組み、さらに進化した松前町や日本の話ができれば、と思います。

次回の開催は、令和7年2月、好評だった「介護版しゃべり場」の予定です。

以上